

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第三十回 後藤新平『政治の倫理化』

後藤新平について、もう一度だけ述べておこう。

後藤といえは、満鉄の基礎を築いた人物であるかのようにいう人がいままなお少なくない。だが、後藤自身はそう語ってはいない。満鉄経営についての後藤の口吻は、愚痴、不平、不満ばかりだったと先に記した(第二十七回)。台湾総督府民政長官の時代の語りや文章のなかで輝いていた、あの明朗さには不思議なほどに満鉄時代には影を潜めている。

明治四十一年(一九〇八)七月、後藤は「満鉄十年計画」を奏上。その直後に盟友・桂太郎から入閣の誘いがあり、同月十四日に桂内閣が成立、同時

に後藤は逡信大臣となった。満鉄總裁の座は、台湾総督府から連れてきた中村是公に譲ってあっさりと辞任。在任期間は一年と八カ月であった。台湾を去る時のような未練は後藤にはなかった。かといって大臣という職責は後藤が何としても握み取りたいものだったかどうか。あるいは権力を手にしなければ何ごともなし得ないという教訓が満州時代の経験から後藤のなかに芽生えていたのかもしれないが、そのへんのところはよくわからない。

それにしても在職中に後藤が成し遂げた満州で

の成果は、少なくとも後藤自身の感覚からいえば、台湾時代のあのあふれる自信と実績とはおおよそかけ離れたものであった。実際、後藤は桂より入閣要請を受け、これを諾としたその日の夕刻、身体不全を訴え赤十字病院に入院。ことなきを得て通信大臣の席に着いた。五十一歳というのはいまでいえば「男盛り」であろうが、平均年齢四十五歳くらいの時代のことである。後藤の闘争心は台湾時代に火がついて燃えあがったが、満州時代には燃え尽き、その後は権力はたつぷりと手にしたものの、台湾時代にみせたような達成感を得られず、つねに不全感に苛まれていたのではないか。

内務省衛生局長、台湾総督府民政長官、初代滿鉄総裁を経て、内務大臣、外務大臣、東京市長、再度の内務大臣といえは、その経歴はいかにもきらびやかである。しかし、それらはすべて台湾総督府民政長官時代の偉大な成果の残照のようなものだったのであろう。

「生物学の原理」にもとづく諸政策を台湾社会の深

部にまでいきわたらせる難業に渾身の力をもつてのぞみ、統治開始後約十年で台湾の財政的自立を達成させるといふ、目を見張らせる成果を残した。これが後藤の語るべき人生のほとんどではなかったか。

後藤は山本権兵衛内閣に内務大臣として入閣、直前に起こった関東大震災の復興のためのヘッドクォーター「帝都復興院」の総裁をも兼務した。しかし、十二月二十七日に摂政宮裕仁親王が虎ノ門外においてテロリスト難波大助により狙撃、この不祥事の責を負わされて山本内閣は成立後四カ月余で引責辞職。後藤も内務大臣ならびに兼任の帝都復興院総裁をも免ぜられて下野。以来、後藤が政界に復帰することはなかった。

大正十五年（一九二六）二月十一日、脳溢血に襲われ伏臥を余儀なくされたものの、これを癒して「政治の倫理化」運動を開始した。同年四月二十日には青山会館に多数の聴衆を集めて演説、これを皮切りに、その後、全国各地を足繁くまわり、講

演回数には実に二百六十回、講演時間は計三百九十時間に及んだと記録される。この間に、再度の脳溢血に襲われたものの、これを克服。その後、ロシア訪問の旅に出てスターリンやカラハンなどと会谈、帰国後にも全国遊説をつづけた。驚くべき行動力であった。昭和四年（一九二九）四月、東京から岡山に向かう遊説途上の車中で最後の脳溢血を引き起こし京都で下車、府立病院に運ばれ、十三日午前五時三十分逝去。享年七十二。

後藤最後の政治的人生がこの「政治の倫理化」運動である。青山会館での三時間に及ぶ演説の草稿が『政治の倫理化』というタイトルの小冊子として出版されている。高揚する言葉遣いがまぶしい。声までが聞こえてきそうだ。往時の政治、政界、政局に対する徹底的で根源的な批判であり、権力批判であり、権力獲得のための金力批判であり、これらを生んだ「物質力崇拜」風潮への批判である。後藤は「政治は力なり」という考えをこう論難する。

力と申すことの意味が、高尚なる道德的の力と申すこととありますならば、我輩は異論はないのであります（拍手）、上述のごとく、力とは物質的、現実的な力と申す意味でありますために、この言葉の流行するところ、国を挙げて低級低劣なる物質力崇拜の風潮に走らしめたのであります。この大勢を転回いたさなくては到底今日の日本の悪風を一洗することは出来ないであります。

要するに、物質主義に偏傾するも不可、また精神主義に偏重するも不可、靈肉一如、物心一如でなければいけないと信じます。乃ち政治闘争の倫理化が必要となるのであります。是は無用ではありませんか（拍手）。

三時間の演説というが、内容としては以上のような言辞の多様な繰り返しである。そういつては何だが、マスコミにちよくちよく顔を出してはしたり

顔で時局を論じるコメンテーターの顔が私には浮かんでくる。いつの時代にもよくあった、そしていまなお多い政治批判のお決まりのパターンなのであるう。

後藤がみずからの思想・信条を決定的なものとしたのは明治二十二年の『国家衛生原理』だと先に述べたが(第二十二回)、この著作ほど充実した後藤の文章は他にない。しかも、そこに書かれたエッセンスが、台湾統治を真の偉業たらしめた政策思想となったのである。

『原理』では後藤はこういつていた。社会で生起するさまざまな事柄について、これを正邪だとか不正だとかいつて判断するのはまちがいだ。判断基準があるとすれば、人々が健全な生活を手に入れるのにそれが適正であるのか否か、でなければならぬ。人間は元来が「生理的円満」を満たしたいという「生理的動機」に衝き動かされて生きている。これは「各人ノ身体ニ固有セル一種ノ天性」だとまで主張していた。

しかし、人々の生理的円満は個々人の力によって実現できない。個々人の力を超えた個々の人間を健全に生存させるための「公共ノ力」が不可欠であり、これが国家であり国家権力だといっていたはずである。「政治は力なり」は、後藤思想の結節点だったのではなかったか。この思想は後藤の「国家起源説」でさえあろうと私は考える。

後藤の思想がどこかで反転したのか。はたまた「老いたり、後藤」なのか。台湾統治の成功という偉業は、最晩年の後藤にとつては何だったのかと問わざるを得ない。人は誰しも老いる。老いれば思想も変わる。しかしあの後藤が、こうまで通俗的な言説を、病を抱えながらなお、実に目のまわるほどの行動力で全国遊説をやりつづけたとは。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、成長のアジア、停滞のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。